

## ストアードプロシージャをネイティブコンパイルから中間コードへ戻す方法

### 1. 初期化パラメータの変更

ネイティブコンパイルから戻すためには、初期化パラメータを変更します

初期化パラメータ名	内 容
PLSQL_CODETYPE	INTERPRETED : 中間コードコンパイル

```
ALTER SYSTEM SET plsql_code_type = "INTERPRETED" SCOPE=BOTH;
```

### 2. ストアドプロシージャの登録ファイルがネイティブコンパイルか中間コードかの調査方法

```
SELECT  PLSQL_CODE_TYPE  FROM DBA_PLSQL_OBJECT_SETTINGS
WHERE  NAME = 'プロシージャ名' AND OWNER = 'ユーザー名';
結果  NATIVE :          ネイティブコンパイル
      INTERPRETED :     中間コードコンパイル
```

### 3. 登録済の既存ストアードプロシージャのネイティブコンパイル化（全体の一括変更）

#### (1). データベースとリスナーの停止

```
SQL> SHUTDOWN IMMEDIATE
SQL> HOST LSNRCTL STOP (OS コマンド)
```

#### (2). データベースの UPGRADE モードでの起動

```
SQL> STARTUP UPGRADE
```

#### (3). 中間コードコンパイルのための定義設定

【Windows の場合】

```
SQL> @%ORACLE_HOME%/rdbms/admin/dbmsupgin.sql
```

【UNIX の場合】

```
SQL> @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/dbmsupgin.sql
実行途中に引数の入力を求められたら、「TRUE」と入力
```

#### (4). データベースの再起動

```
SQL> SHUTDOWN IMMEDIATE
SQL> STARTUP
```

(5). 中間コードコンパイルの実行

【Windows の場合】

```
SQL> @%ORACLE_HOME%/rdbms/admin/utlrp.sql
```

【UNIX の場合】

```
SQL> @$ORACLE_HOME/rdbms/admin/utlrp.sql
```

(6). ストアドプロシージャのネイティブコンパイル化の確認

```
SELECT o.owner , o.object_name , o.object_type , o.status ,  
       s.type , s.plsql_code_type  
FROM dba_objects o, dba_plsql_object_settings s  
WHERE o.object_name = s.name  
      AND s.plsql_code_type IS NOT NULL  
ORDER BY s.type , s.plsql_code_type ;
```

エラー発生で実行できないプログラムの検索のための where 追加条件  
AND o.status = 'INVALID'

注意 s.type が「TYPE」のものは、ネイティブコンパイル出来ませんが正  
常に動作します

結果 o.status : INVALID (エラー発生で実行できないプログラム)  
s.plsql\_code\_type : NATIVE (ネイティブコンパイル)  
// : INTERPRETED (中間コードコンパイル)

(7). リスナーの起動

```
SQL> HOST LSNRCTL START (OS コマンド)
```